

りんご栽培技術情報

～徒長枝管理・高温対策について～

夏期の高温により、日焼け果の発生や果実の着色不良等が懸念されます。
天気予報の確認や、昨年までの園地の状況の振り返りを行い、必要な対策を実施できるよう、準備しましょう。
夏期の防除を徹底し、果実を病虫害から守りましょう。

1 気象経過と3か月予報

5月～7月の気温は、5月第5・6半旬並びに6月第1半旬及び7月第3半旬を除き、平年よりも高く推移しました。降水量は、時折まとまった降雨も見られましたが、6月以降は降雨が少なく乾燥した期間が続きました。

8月～10月の気温は平年より高め、降水量は平年並または平年より多い予報です。

令和7年度（2025年）気象経過図（大船渡）

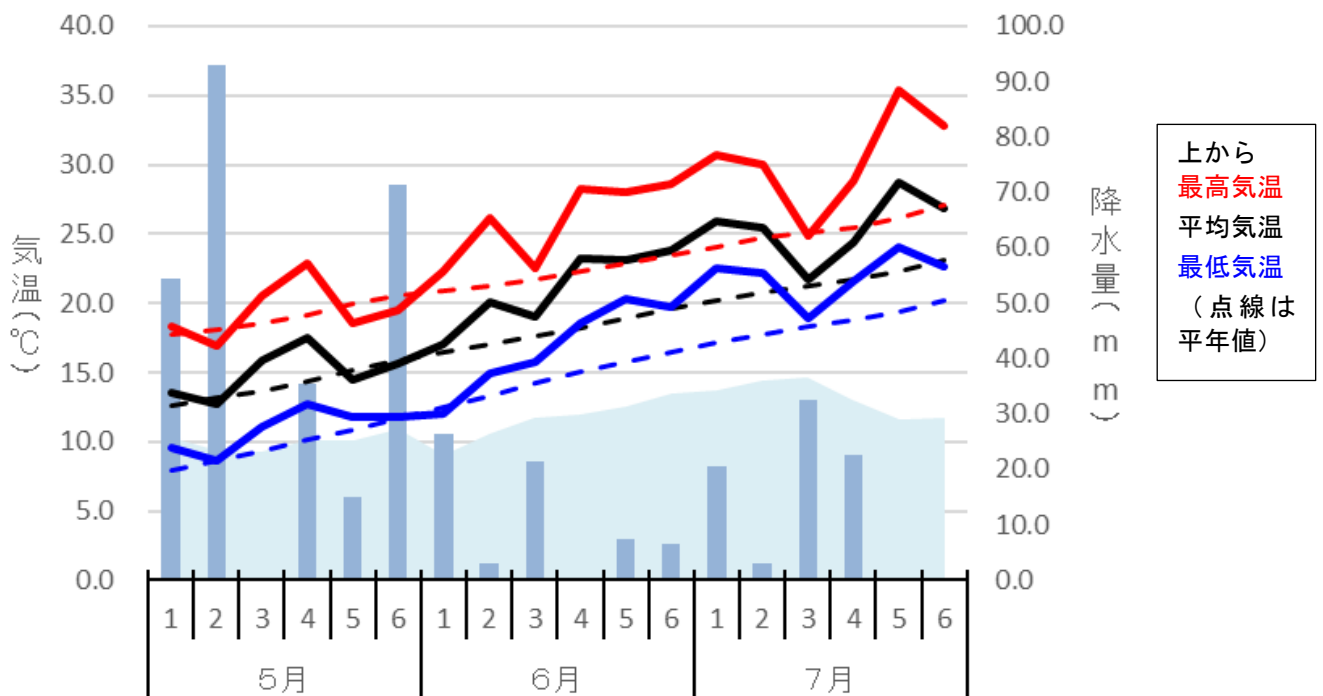


図1 気温及び降水量の推移

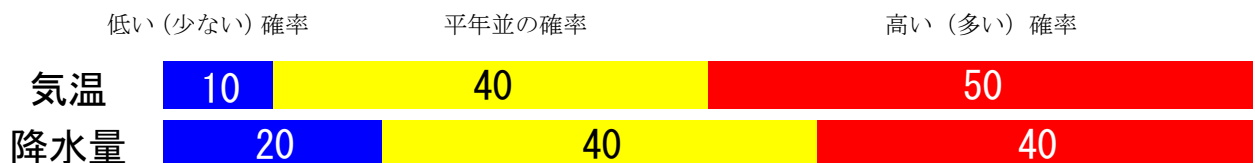


図2 東北地方3か月予報（8～10月、7月22日仙台管区气象台発表）

2 生育状況

(1) 果実肥大

果実の肥大は、「ジョナゴールド」「ふじ」とともに概ね平年並で推移しています。

表 1 定点観測ほ場（陸前高田市米崎）におけるりんごの満開期と果実肥大状況

品種	満開期					果実肥大 (mm)				
						R7 調査日：8月1日				
	R7 年	平年	差	R6 年	差	R7 年	平年	R6 年	平年比	前年比
ジョナ ゴールド	4/28	5/3	-5	4/23	+5	70.5	70.0	75.2	101%	94%
ふじ	4/30	5/7	-7	4/26	+4	64.8	63.2	67.5	103%	96%

3 徒長枝せん除

枝葉を整理し、薬剤の防除効果や翌年の花芽形成を良くしましょう！

(1) 徒長枝せん除の効果

- ◎ 樹冠全体に日光が入るため、果実品質の向上や、花芽の充実が図られます。
- ◎ 余分な枝葉を取り去ることで、樹勢を落ち着けることができます。
- ◎ 薬剤が通りやすくなり、病虫害防除効果が高まります。

(2) 徒長枝せん除の方法

ア 実施時期

8月下旬～9月上旬に行います。

前年の着果不良等により、樹体のバランスが崩れ、枝葉が繁茂している場合は、6月中・下旬にも実施します。ただし、6～7月に過度な徒長枝せん除を行うと、一度伸長を停止した新梢が二次伸長して花芽の形成を阻害するおそれがあるため、必要最低限にとどめます。

イ 実施方法

- ・ 主幹の周囲 30cm の範囲にある徒長枝をせん除します。
- ・ 可能な限り 根元から間引く ことで、切り口から余分な徒長枝が発生することを防げます。
- ・ 紫紋羽病発生園においては、過剰な徒長枝せん除によって樹勢が弱まり、発病を助長するおそれがあるので、必要最小限にとどめます。

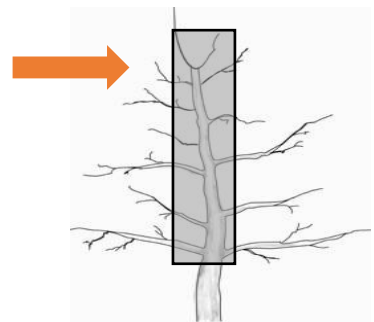


図 3 徒長枝のせん除部位

5 その他の新梢管理

(1) 誘引

誘引により、立ち上がった側枝の発生角度を矯正することで、樹勢を落ち着かせることができます。新梢の場合は、枝が柔らかく再び立ち上がることの少ない8月中～下旬に行いましょう。

(2) 主幹の結束

結実を始めたわい性樹は、強風で倒伏することもあるため、主幹を支柱に2～3か所結束します。

また、結束していたひもがほどけたり、風化して切れそうになっていたりしないか、資材が枝に食い込んでくびれていないか等、結束の見直しも行います。

(3) 枝吊り、支柱の設置

春に良好な樹形をしていた樹が、夏以降は新梢が伸び果実肥大が進むことで枝が下がり、重なる枝が多くなります。枝が重なると葉の光合成や果実の着色に影響を及ぼすので、支柱を入れて日光が当たるようにします。

また、着果量が多いと枝が下垂して重くなったり、強風にゆすられて枝が折れる場合があります。下の側枝では果実が地面についてしまうことがあるので、枝を吊ります。

4 高温対策

今年の夏期も高温となることが予想されます。今後の気象情報に注意し、被害の防止や軽減を図るための対策を行いましょう。

(1) 日焼け対策

りんごは、日最高気温がおよそ32℃以上で、果実に日焼けが発生しやすくなります。日焼け果は、外観品質の低下や日焼け箇所の腐敗等に繋がるため、発生軽減の対策を実施しましょう。

ア かん水

土壌水分の急激な変化による水分ストレスによっても、日焼けの発生が助長されます。高温乾燥が続く場合はかん水を行いましょう。

(2) 着色不良

最低気温が20℃を超える日が続くと、果実の着色が遅れます。

果実の着色が遅れると、果皮色での収穫適期の判断が難しくなるため、過度な着色を期待せず、食味・硬度等を確認して適期収穫に努めましょう。



図4 着色不良果（左）

(3) 収穫前落果

生育期間に高温が続いた令和6年は、「ジョナゴールド」や「シナノゴールド」で収穫前落果が発生しました。

今年も高温が予想されるため、品種・園地ごとに過去の落果の発生実態を把握したうえで、対策の可否を判断しましょう。

ア 収穫前落果対策

- ・ 過去に収穫前落果が発生した品種は、落果防止剤を散布します。

イ 注意点

- ・ 収穫遅れにより落果する場合もあるため、落果防止剤の散布前に、収穫適期の判断を行います。
- ・ 落果防止剤の散布により、収穫期が早まったり、果実硬度が低下したりするおそれがあるため、集出荷や販売の対応も併せて検討します。

表2 落果防止剤の登録内容（抜粋）

使用薬剤	希釈倍率	散布量	使用時期	使用回数
ストップール液剤	1,000 ～ 1,500 倍	300～600 L /10a	収穫開始予定日の 25～7 日前 （但し、2 回散布の場合は 10 日程度間隔をあける）	1 回※
ヒオモン水溶剤	1,000 ～ 2,000 倍	300～600 L /10a	収穫開始予定日の 21～4 日前	2 回以内

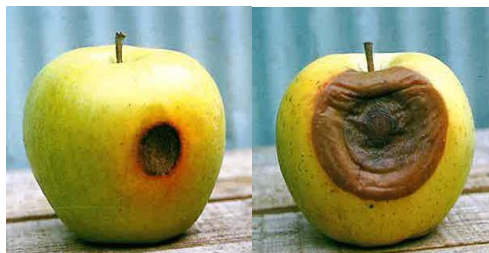
※登録上の総使用回数は2回以内だが、熟期及び果肉の軟化が促進されるおそれがあるため1回とするもの

5 病虫害防除

令和6年は炭そ病や輪紋病といった果実の腐敗を引き起こす病害が多発しました。夏期の防除を徹底しましょう。

（1）炭そ病

県内では、近年病原性の強い菌 *C. gloeosporioides* による被害が確認されています。令和7年は主な感染時期にあたる6月が高温で推移したことから、秋期の多発が懸念されます、8月以降も防除を徹底して感染を防ぐほか、発病が見られた果実は見つけ次第摘み取り、園地の外に持ち出して処分しましょう。



（2）輪紋病

6月下旬～8月下旬が主要な感染時期で、この時期に高温多雨条件が続くと感染しやすくなります。幼果で感染し、果実の成熟とともに発病します。

枝幹に発生するといぼ皮症状になり、ここから胞子が飛散し、果実に感染します。薬剤を主幹までしっかりと到達させ、枝幹のいぼ皮を作らないようにしましょう。



（3）ハダニ類

高温かつ乾燥した状態が続くと、発生が多くなる可能性があります。

主幹近くの果そうや新梢の基部を確認し、発生を確認した場合は薬剤を十分量散布しましょう。



【連絡先】 大船渡農業改良普及センター（27-9918）

【資料利用上の注意】

この資料は、令和7年7月23日時点の農薬登録情報に基づいて作成しています。

農薬は、使用前にラベルの表示事項を必ず確認のうえ、使用基準を遵守し、農薬使用者が責任をもって使用してください。また、農薬の飛散防止対策に努めてください。